

# 野地潤家述「国語学習の極印と深化」に関する一考察

竜田 徹

## 1 問題の所在

2013年度後期に担当した「初等国語科教育法Ⅱ」の受講生(大学3年生)から、あるときの授業感想カードで次のような質問が寄せられたことがある。それは、精確な言葉はわすれてしまったが、「きょうの感想カードの紹介の時、先生は、児童の記憶に残る授業だけがいい授業ではないとおっしゃいましたが、それはどうしてですか」という質問であった。講義では毎回最初の10分ほどを使って、前回の感想を紹介する時間をとって、この回の前の感想紹介の中で、「教育実習の反省を踏まえ、児童の記憶に残る国語の授業ができるよう、勉強していきたい」という感想を紹介し、それに添えて上のようなコメントをしたのだったように思われる。しかし結局この講義の中でこの質問に答える機会をつくることはできなかった。

教育実習を経験した学生たちの中には、児童生徒の記憶に残る授業ができる教師になりたいという思いを新たにすると多いように思われる。また、わたしも学生たちに、そのような授業をしたいと思っている。しかし、その理由を問われると、教師としての自分の働きを認めてほしい、自分でも確認したいとか、記憶に残らないよりは記憶に残った方がよいといった、教師本位の、あるいは漠然とした理由がまず先に出てくるのではないだろうか。学習者の記憶に残る国語科授業は、学習者にとってどんな「いいこと」をもたらすのかという問いに対する答えを、わたしたちはしっかりと持ち合わせていないように思われる。一方で、授業するのは教師の自己満足のためではない、授業は単なる思い出づくりではなく、読み書き聞き話す言語活動力を身につけさせる営みであるという意識も強く働いて、わたしはそのとき「児童の記憶に残る国語科授業だけが、いい授業なのではない」とコメントしたのではなかったかと思われる。しかしそうは言っても、記憶に残る国語科授業が何らかの価値を内包しているのではないかという思いも、簡単に消えるわけではなさそうな、わたしたちの実感である。

これまでわたしは、「国語科教育における学習者の目標意識の育成」という問題意識のもとに研究を行い、「国語学習回想」を書くことの有効性を明らかにしてきたが(竜田徹[2010.12], [2011.3], [2014.3])、そのなかで、国語学習回想の中で言及される、記憶に残る国語科授業にはどのような価値があるのかということの考察が新たな課題となった。これを問うことは、国語学習回想を書く取り組みを意義づける重要なことである。

そこで本研究では、「国語科授業の記憶は児童生徒にとってどんないいことをもたらすのだろうか」という問いを設定し、ある一人の真摯な国語教育者の講演(後日文字化された講演記録)を手がかりとして、この問いの答えを見つけていきたいと思う。これが本研究の目的と方法である。

## 2 資料の概要

手がかりとするのは、昭和58年(1983年)8月に開かれた広島大学教育学部国語教育学会における野地潤家氏の講演の記録である。この年度は野地氏にとって「広島大学教育学部に勤めうる最終

の年」<sup>1</sup>であり、この講演もそうした経緯を踏まえて企画されたものであった<sup>2</sup>。野地氏はこの講演について、「在職中、中等学校の国語科担当者・国語教育研究者を養成する仕事にうちこんで、三〇数年を過ごしたこともあって、講演には私自身の旧制中学校国語学習史上の経験事例をとり上げることにした」<sup>3</sup>と述べている。同じ国語教室の学生・院生・同僚・OB・中学校高等学校の国語科教員らを聞き手として迎えながら、自身の中学生時代（13～17歳頃）の国語学習の印象的なエピソードを、小さな考察を挟みながら明らかにしたのがこの講演「国語学習の極印と深化」であった<sup>4</sup>。「極印」はこんにち耳慣れない言葉だが、辞書には「動かしがたい証拠として示すもの。証明。刻印」と説明される語で、もとをたどれば、金貨銀貨や器などの品質保証の印として打つものから来ている語のようである。講演当時、野地氏はまもなく63歳を迎えるというときであった。中学生時代の国語学習を約50年後に振り返るというスケールがある。50年前の自分の国語学習は、いまの自分にどう息づいているのか。本研究の手がかりとして充分かつ適切な資料であると考えた。

この講演を文字起こししたものは、管見の限り3冊の書籍に収録されている<sup>5</sup>。時間的に後に刊行された2冊には節ごとのタイトルが加えられているが、本文に大きな変更は認められない。本研究では、現在もっとも手に入りやすいと思われる野地[1985]『国語教育の探究』版をもとに考察を行った。この本には、本講演記録「国語学習の極印と深化」ともう一つ、昭和59年2月の最終講義「国語教育研究の拠点と方法」が収められており、おそらく、講演のほうは学習者の立場から、最終講義のほうは研究者の立場からというように、ちょうど一對の車輪のようにして、野地氏の国語教育論が述べられたのではないかと思われる。

### 3 「国語学習の極印」の意味

では、学習者の立場に軸足を置いて論じられたと思われるこの講演において、野地氏はどのような「経験事例」を取り上げたのだろうか。それを講演の流れに沿ってまとめたのが下の表で、七つに分けることができるように思われる。

野地[1985]節タイトル	経験事例	備考
はじめに	—	—
一 国語学習の回想 ——「父の記憶」(宇野浩二)	1 白田時太先生の 「父の記憶」の授	指名音読、宇野浩二への親しみ、島崎藤村の詩の紹介、教科書を大事にすること、「父

<sup>1</sup> 野地潤家[1985]『国語教育の探究』共文社、p. 229

<sup>2</sup> 山田夏樹[1984]「二十四年」大槻和夫編『野地潤家先生に学びて』溪水社、p. 249「明年春をもって広島大学を定年ご退官になられる先生に対しての、会員からのたつてのお願いが実現したのである」

<sup>3</sup> 注1に同じ

<sup>4</sup> 「極印」は「ごくいん」とも読むが、当時聴衆の一人であった山元隆春氏の証言：「私の記憶では「ごくいん」です。また、このタイトルについても、当時会場で「ごくいんとしんか」というアナウンスがあり、野地先生もそれを否定はされていなかったと思います」（2014年2月26日付稿者宛私信）を踏まえ、本稿では「ごくいん」と読むものとする。

<sup>5</sup> ①大槻和夫編[1984]『野地潤家先生に学びて』溪水社、pp. 1-42「国語学習の極印と深化」、②野地潤家[1985]『国語教育の探究』共文社、pp. 9-57「I 国語学習の極印と深化」、③野地潤家[2002]『昭和前期中学校国語学習个体史——旧制大洲中学校(愛媛県)に学びて——』溪水社、pp. 635-674「VI 回想 旧制大洲中学校に学ぶ 一四 国語学習の極印と深化」の3冊である。①は講演主催者が録音をもとに書き起こしたものと生まれ、節名はなく、「一」～「一七」の見出しで分けられている。②では表のように本文が九つの節と「はじめに」「おわりに」に再構成され、節名も入れられ、言葉遣い・かな表記・記号等が整理されている。③は節の番号が漢数字から算用数字に改められるなど、本の一部として体裁が整えられているが、ほぼ②のままである。②③は野地氏自身が加筆修正を行ったものと思われる。

のこと—— 二 「父の記憶」と宇野浩二	業とそこからの 深化	の記憶」の研究、宇野浩二の研究
三 白田時太先生のこと	2 白田時太先生の 国語指導	先生の人柄、言葉の紹介、校内弁論大会への推薦、先生の挙措、読書指導、家庭訪問、卒業アルバムに書いていただいた言葉
四 国語学習の回想 ——「こころ」（夏目漱石） のことなど——	3 仲田庸幸先生の 「こころ」の導入 指導	漢字テストの誤答をめぐるやりとり、小説の語り手に同化したお話
五 仲田庸幸先生のこと	4 仲田庸幸先生の 国語指導	読書指導、自分の好きな表現に出会うこと
六 「夏期作文練習帳」のこと	5 夏期作文練習帳	あったことを忘れていた国語学習のこと
七 国語学習の回想	6 阿部先生と自由 題作文	作文の成績が伸びなかったこと、「ちっともおもしろくない」授業のこと
八 「東京文学院講本」と五味 常真先生	7 文学への打ち込 みと五味常真先 生の激励	文学への関心と教室の国語学習とが結び合わされていたこと、校長室での個別進路指導、仲田先生のノート指導
九 国語学習の極印	—	白田時太先生の「父の記憶」の授業のこと
おわりに	—	—

これを見ると、必ずしも「おもしろかった学習」や「すぐれた授業」ばかりが取り上げられているわけではない。すでに論文等で発表された内容<sup>6</sup>を含めながら、「国語学習の極印とはなにか」ということが浮き上がってくるように事例が選ばれたのではないかと思われる。国語科授業のエピソード、つまり学校の国語教室での事例はもちろんであるが、それ以外にも、授業時間外での個別指導や夏休みの宿題のように学校生活や日常の言語生活全般にわたって経験事例が拾われているといえる。白田先生や仲田先生など国語教師との関わりが語られている点、読書指導として先生方から直接本を手渡されたことが語られている点も注目される。このうち国語科授業のなかで読者（聴取者）がもっとも印象づけられる一つは、3番目の、「仲田庸幸先生の国語のご授業の中で、いつまでも鮮明に印象づけられているひとつ」<sup>7</sup>として紹介される、夏目漱石「こころ」の導入指導ではないかと思われる。その一部を次に引用したい。

たしか三年生、昭和一〇年、一九三五年の二学期の最初の時間のことです。先生は教室に来られると、いつものように淡々とした口調で、「実はこの夏、鎌倉の海岸に海水浴に行っただね、そこでひと夏を過ごし、その海辺で自分は一人の老先生に出会った。その老先生は何かさみしそうで、秘密を

<sup>6</sup> 表の「経験事例」のうち、1と2は野地潤家[1998]『野地潤家著作選集 第1巻 国語教育个体史 原理編』明治図書、pp. 239-267「V 国語学習个体史の具体事例 2 国語学習个体史その一—白田時太先生のこと—」（初出は『研究紀要』（大下学園）6、1962年8月）に、3と4は同書 pp. 267-321「V 国語学習个体史の具体事例 3 国語学習个体史その二—仲田庸幸先生のこと—」（初出は『研究紀要』（大下学園）13、1968年11月）に、それぞれ収録された内容に基づいて構成されている。それらの内容は、野地潤家[2002]『昭和前期中学校国語学習个体史—旧制大洲中学校（愛媛県）に学びて—』溪水社、pp. 381-474「III 先生方との出会い」にも収録されている。

<sup>7</sup> 注1に同じ、p. 37

もっているようなところがあったが、それが、どういう種類のものであるかは、知る由もなかった。」と言われました。仲田先生は愛媛県の上灘といいます海岸のお生まれでありまして、どうして、夏休みの海水浴に鎌倉まで行かれたのだろうか、子供心にも、どうにも不思議ですし、おかしい、おかしいと思うんですけども、話し上手で、「だんだんその老先生と親しくなりますと、その先生は私に、これは絶対に人に言うてはいけなと、言われながら、自分はなぜ月に一度ずつ、必ず雑司谷の墓地に詣るのか、ということをお話して下さった。この話には非常に深いわけがあって、私が知りえたのは、次のようなことであつた。」——というふうに、こういう調子で話をすすめられました。(…中略…) 私たちは、その時間の終了するの忘れて、一心に聞きひたっていたわけです。仲田先生は、時間終了のベルが鳴ると同時に、「……という話が、夏目漱石の『ころ』という作品にある。」と言って、にこっと笑つて、そのまま教室を出て行かれました。教室に残された私たちは、仲田先生にまんまとかつがれたのを知つて、わあつとざわめきました。同時に私たちは、この時間のお話をきっかけとして、競うように、漱石の「ころ」を読みました。<sup>8</sup>

文学やその授業に関心を持つひとであれば、自分もこういう授業を受けてみたかつた、こういう授業をしてみたいと思うのではないかというような、魅力あるエピソードである。野地氏はこの授業について、「『ころ』という作品の構成の機微をみごとにつかんで、作中の「私」にそっくり仲田先生が同化して、自分がナレーターをもちかねて、わが身の上のこととして、手際よく一時間の中に、語り収められたそのやりかたは、なんというすばらしい文学教育であろうか。(…中略…) これはわたくし自身の胸奥にも、明星のように、ひとときわ明るく冴えてかがやいている。文学教育における独創的な方法の一つが、ここには見いだされるように思う」<sup>9</sup>と述べている。これを文学の授業ととらえるか、読書指導ととらえた方がよいのでないか等々、この授業に関する意見はあるかもしれないが、国語教育者の立場から、自分が受けてきた国語科授業のなかに、国語教育の理想の一つを見出しているということは指摘できるであろう。

またもう一つ、2番目のエピソードの中では、中学校卒業に際して担任の白田時太先生から贈られた言葉のことが、次のように回想されている。

同級生たちはみな、進学——旧制高等学校、或は専門学校へ進みましたが、私だけは、すぐそのまま、土地の税務署に残るといふことになりました。卒業後、みんなとあいさつに行きまして、アルバムに、先生に言葉を書いていただくことになりましたときに、私には、ちよつとお考えになつたようで、横書きに、「潜龍 地に在り」(潜んでいる龍、潜龍地に在り、)という言葉を書いてくださいました。(…中略…) 一人だけ、進学をあきらめて、就職する私に、決してくじけるな、決して自分でも小さく、過小評価しないように、という、話し言葉では何もおっしゃいませんでしたけれども、「潜龍在地」といふその四つの言葉が、どんなに、私の精神のささえになつたか。<sup>10</sup>

ここでは国語教育者というよりは一人の言語生活者としての立場から、いまの自分を支えている「国語学習」のことが思い起こされており、言葉がひとを支えるという国語教育がどういう形で成立するのかということをお考えさせられるものがある。池田悦子氏は、『国語教育の探究』の書評のな

<sup>8</sup> 注1に同じ、pp. 37-38、中略は竜田による(これ以降の中略箇所も同じ)。

<sup>9</sup> 野地潤家[2002]『昭和前期中学校国語学習个体史——旧制大洲中学校(愛媛県)に学びて——』溪水社、p. 449

<sup>10</sup> 注1に同じ、pp. 34-35



かでのエピソードを引用し、「ここに、野地先生の国語教育研究への情熱を育んだ「極印」をみることができる」<sup>11</sup>としているが、そうした「情熱」が育まれたのも、白田先生の言葉の記憶が、当時進学を断念せざるを得なかった野地氏の「精神のささえ」となっていたからであろう。置かれている状況によって、また時間の経過にしたがって、自分が経験した国語学習の記憶の質・量やその語り方は変化していくと思われるが、そうした変化のなかで、絶えず自己の内側にあつて、自分の国語教師としての歩みや言語生活者としての歩みに働きかけ、それを支え、励ましてくれるもの、それが「国語学習の極印」と呼ばれているのではないかと考えられる。その意味で「極印」は、国語学習の記憶のなかでも、そのひとにとっての特別の位置を占めるものといってよい。

#### 4 国語教育個体史研究にみる野地氏の研究理念

このように、実践者や学習者が、個々に、自分の国語学習の「経験事例」を語るということは、国語教育研究の方法として野地氏が確立した方法であり、「国語教育個体史研究」として知られている。

個体史研究の方法として野地氏が重視したのは、学習者が書く「国語学習回想」であった。その回想の中には、「その時期その時期の国語教育実践(国語学習活動)の様相が端的に把握されている」<sup>12</sup>と考えていたからである。同時に、野地氏が「記憶力」を重視していたことも注目される。野地氏のすぐれた記憶力については多くの教え子が報告しているところである<sup>13</sup>。野地氏自身も、国語教育史研究に関する論考のなかで、「明治初期の記憶・暗誦中心の国語教育は、むしろ注立的、受動的な教授・学習という性格を有し、その点からは批判されがちであるが、「記憶力」を重視していくことそのことは、今後も教育計画の中で適正に扱われていかなければならない。思考力の裏づけになり、基盤になる記憶力を、軽く見ることは許されない」<sup>14</sup>と述べている。もちろんここでの記憶力は、国語科が育む「思考力の基盤」として述べられているのであるが、野地氏の国語教育研究(個体史研究への関心)を踏まえれば、記憶力は、「国語学習回想を成立させる基盤」としても位置していたのではないかと考えられる<sup>15</sup>。

さらにもう一つには、「身近な国語教師への敬愛」が挙げられるだろう。野地氏は、白田時太先生の授業をふり返る中で、「国語教育史の実質を求めようとするとき、わたくしたちは、もっともっと自己の身近の国語の先生について、その国語愛・人間愛・国語教育愛を、とくとしみなくてはならない。文献にはならないところで、どれほど深く誠実な営みがなされていることか。国語教育

<sup>11</sup> 池田悦子[1986.8]「野地潤家著『国語教育の探究』(新刊紹介)『国語教育研究』30、pp.161-162

<sup>12</sup> 野地潤家[1998]「国語学習個体史の把握方法」『野地潤家著作選集 第1巻 国語教育個体史 原理編』明治図書、pp.50-51(初出は『実践国語』1955年11月)

<sup>13</sup> 大橋勝男[1984]「先生よりの賜りもの」大槻和夫編『野地潤家先生に学びて』溪水社、p.222「先生の記憶力には、格別なものがある。(…中略…)しかし、思うに、それは決して単なる自然の記憶力に頼っているものではないに違いない。おそらく、そのことの教育的重要性を自覚され、心して記憶に励んでいられるのだと思う」など。

大槻和夫編『野地潤家先生に学びて』は、野地氏の指導を受けた方々による文集である。その一編によれば、文集の執筆に際しては「形式的な謝辞は避け、野地先生の教育者としての側面が、事実をとおして浮かびあがるように」という「ただし書き」があったという(坂根俊英「野地潤家先生に学びしこと」p.290)。このように、本書は野地氏の指導の実際が学習者の立場から叙述され、明らかにされており、野地氏の研究理念や教育観を理解するうえで重要な資料となっている。また、本書のなかには講演「国語学習の極印と深化」に言及する文章が数編あり、本稿で直接引用しなかったものも含めて考察の手がかりとなった。

<sup>14</sup> 野地潤家[1998]「国語教育における思考力——国語教育の遺産——」『野地潤家著作選集 第5巻 国語教育史の探究』明治図書 p.24(初出は『教育学全集5 言語と思考』小学館、1968年)

<sup>15</sup> もっとも、国語学習回想を語るためには、そのための「思考力」が必要になるということも確かであろう。

は、そのような人々の営みによって支えられているとあってよい<sup>16</sup>と述べている。自分の身近にある国語教育・国語教師の営みを、みずからの記憶力を発揮しながら、言葉にしていく・回想するという、いわば「伝記の発想」とでもいえるものが、国語教育个体史研究の根底にある方法であり、また考え方であるといえるように思われる。野地氏の教えを受けた西村佳子氏は、当時の指導の様子を次のように述べている。

大学一年の合宿の時のことが、今でも一番鮮やかに心に残っている。「国語教育」というとてつもなく大きな題目の分科会に参加した。その時、偶然隣りに座られたのが野地先生だった。司会が「日頃疑問に思う国語教育の問題を出し合うことから始めたい」と切り出し、「国語教育と国語科教育はどう違うのか」とか、「国語教育では何を教えるべきか」など、大きな問題が次々出された。入学してまもない私は大変困ってしまった。最後に私の順番がきて「まだ何もわからない」と言おうとしたら、それを察<sup>み</sup>しられたかのように野地先生がことばをひきとられた。「里村さんは下関南高校でしたね。H先生に習いましたか。」「はい、私が大変影響を受けた先生です。」「H先生はこの先輩でもあります。印象に残った授業の事など話してみてください。」突然のこととまどいながらも、これなら話せると安心して話したと思う。野地先生が、「これも生きた国語教育の問題です。しかも他の誰にも話せない事ですから大変貴重です」と言われ、他のメンバーにも次々に同じような質問をされながら、見事に先輩の方々が出された問題に答えていかれた。あまりにも自然な進行であり、しかも的確であったから、私の胸はドキドキした。また、まだ何もないと思っていた自分にも、身近なところに国語教育を考える手がかりがあり、意識しないままに積み上げてきたものがあるのだと気づかされた。

自分の学習の歴史を大切にすること、教室に出れば日々の授業の歴史を大切にすることは、野地先生が繰り返して四年間言われ続けたことだった。<sup>17</sup>

ここに、国語学習回想・その成立基盤としての記憶力・身近な国語教師への敬愛という三つによって成り立つ「歴史」をたいせつにするという、野地氏の研究理念を見出すことができる。それは講演「国語学習の極印と深化」にも色濃く反映しているといえるだろう。

## 5 「深化」の意味

「国語学習の極印」の意味と、その背景にある野地氏の研究理念を見てきた。これを踏まえ、講演の中で語られた経験事例の中から1番目と5番目のものを取り上げて検討を加えたい。1番目の事例は講演記録の中でもっとも多く紙幅をとっている箇所であり、「極印」に関する野地氏の考え方がよく出ているエピソードである。また、5番目の事例は、1番目のものとは対照的な事例として位置づけられるように思われる。

このうち、1番目の「父の記憶」の授業では、ある日の保護者参観日に野地氏が指名音読を担当したことが語られている。担当は白田時太先生であった。「父の記憶」は、中学2年生国語の副読本『第二讀本』<sup>18</sup>に収められた「小説」<sup>19</sup>で、「生みの土地・生みの人々」という単元の教材の一つと

<sup>16</sup> 野地潤家[2002]『昭和前期中学校国語学習个体史——旧制大洲中学校(愛媛県)に学びて——』溪水社、p. 411

<sup>17</sup> 西村佳子「一つの思い出から」[1984]大槻和夫編『野地潤家先生に学びて』溪水社、pp. 364-365

<sup>18</sup> 齋藤清衛編、星野書店、1926年刊。「父の記憶」はpp. 108-113に収められている。

<sup>19</sup> 芥川龍之介編[1981]『近代日本文藝讀本 第五集』日本図書センター(芥川龍之介編[1925]『近代日本文藝讀

して位置づけられている。この教材は、作中の「私」（宇野自身とされる）が3歳で亡くした父のことを追憶する随想風の文章で、本文は「私はやつと自分の足で、よちよちと家の畳の上を歩き始めた時分に父に死に別かれた」という文で書き出され、「私の父は或日、突然脳充血を起こして、十日程床に就いてみて、そして死んだのである。私はその時の広い、そして片付けられた座敷と、天井から吊るされた氷嚢と、物々しい寝床と、眼鏡をかけた父の顔と、そして不思議なことに、そこへよちよちと一人で危ふげな足取をして歩いていった私自身の姿とを覚えてゐる」など、父の記憶が断片的に語られ、「何しろ私が彼に就いて何の記憶を作る能力のないうちに、彼は私から、そしてこの世から、消えて行つてしまつたのである。」と結ばれる<sup>20</sup>。

白田先生は本文の音読を野地氏に指名し、その際、本文中の「彼」という語を「父」と置き替えて読むように伝えた<sup>21</sup>。音読を始めて、「父」と置き替えるべきところをついそのまま「彼」と読んで訂正したりしながら読み進み、ずいぶん読んだからそろそろ次のひとに交替だろうと思って先生をちらっと見ると、「いいから続けて読みなさい」と指示があつて、とうとう教材全部を「おしまひまで一人で読む結果になつた」ということが印象深く回想されている<sup>22</sup>。そして、「原作に忠実に、原文に忠実に読むのでなくて、「彼」を「父」に置き替えて読む、ということ」<sup>23</sup>と、「途中で、読み手交替をさせられないで、終わりまで読ませていただいたということ」<sup>24</sup>の二つのことがいまでも記憶に鮮やかに残っているとし、次のように考察されている。

のちのちによみがえってまいりますのは、そういう、読ませ方ひとつにしましても、心のこもった、形式的機械的なやり方にならずにそういう指導のし方ではなくて、その時その時にかもし出されているものを本当に見きわめて読ませていくという、そういう先生のなさり方が、年を重ねるにつれて、私の中に印象深くよみがえってきたわけでございます。<sup>25</sup>

学習当時の印象としては、先生の指示に対する「驚き」や、最後まで読ませてもらったという「嬉しさ」<sup>26</sup>であったものが、その後の歩みのなかで繰り返し思い返され、温められ、次第に白田時太先生による国語教育的判断だつたことが分かつてきたのではないかと思われる。

学習当時はふとした印象的な出来事だつたものが、後々まで記憶に残り、それはその先生の国語指導の一つだつたと気づいたり、自分の言語生活の指針となつたり、国語教師としての土台となつたりするという経験は、わたしたちにとって決して珍しいものではない。それは、学生時代に刻みこまれた国語学習の記憶が、人生の歩みの中で育てられ、深められ、いま目標や励ましとなつて自分を支えているのだと考えられる。たとえば野地氏は、「筆者の宇野浩二さんという方への親しみの

本』興文社の復刻版)の関口安義「解説」p.7において、本作品が「小説」に分類されていることに従つた。

<sup>20</sup> 引用は注1の文献、pp.12-15による。表記を現代のものに改めた箇所がある。

<sup>21</sup> たとえば注1の文献p.13には、「後で人に聞いて見ると、彼が死んだのは私の数へ年四歳の年の三月二十日のことであつた。(この「彼」というのを、「父」と置き替えて読みなさい、という指示があつたわけでございます。)」というように、「父の記憶」本文の引用に添えて、白田先生からなされた音読の指示のことが注記されている。

<sup>22</sup> 注1に同じ、pp.11-15

<sup>23</sup> 注1に同じ、p.15

<sup>24</sup> 注1に同じ、p.16

<sup>25</sup> 注1に同じ、p.12

<sup>26</sup> 「「彼」とありますのを、「父」と置き替えて読みなさいというのには、本当にびっくり致しました」(注1に同じ、p.12)、「終わりまで読ませていただいたということは、子供心に嬉しかったわけですが」(注1に同じ、p.16)という野地氏の言に基づく。

ようなものは、この時期にもつことができたように思います」<sup>27</sup>と述べている。「父の記憶」の授業の後、野地氏の場合は、「父の記憶」の全文<sup>28</sup>と出会い、宇野浩二の作品と出会い、伝記『宇野浩二伝』やその著者・水上勉の作品を読んできたことが、この講演記録の中で語られている。なかでも、宇野浩二の文章に親しんだこと、たとえば「追悼歌とも、伝記とも、回想記とも、作家論とも、いや、それらのすべての要素をふくむ」<sup>29</sup>と評される伝記『芥川龍之介』<sup>30</sup>に見られるような文体に触れ得た経験は、野地氏の国語教育個体史研究への着想をどこかで育んだかもしれない。宇野が追求したとされる「『私』を書く必然、『私』を描く方法」<sup>31</sup>というのは、国語教育する『私』を叙述しようとする個体史研究の発想に通じるだろう。だとすれば、「父の記憶」の授業のことが野地氏の研究人生の大きな節目ともいえる本講演で言及されたことは決して偶然ではなく、野地氏は「父の記憶」を端緒として作家・宇野浩二の方法や文体に個体史研究の方法を読んでいた可能性もある。白田先生の教室における「父の記憶」との出会いとそこから始まる研究のプロセスこそ、「国語学習の極印と深化」といえるのではないだろうか。いずれにしても、ある国語学習がきっかけとなって、ある作品や書き手に親しみをもったり、自分の話し言葉や書き言葉に自覚をもったりして、それを自分なりに深めていくことが可能になるということを、野地氏の講演題目にある「深化」という語は、指し示しているのではないかと考えられる。

他方、5番目の事例では、記憶にはなかったが記録としては残っている国語学習のエピソードとして、夏休みの宿題として出された「夏期作文練習帳」が紹介されている。それは、「夏休み中、最も思ひ出の深い一日について（…中略…）自由に発表してください」、「次の言葉を用いて短文を作りなさい」、「暑中見舞の文」を書きなさい<sup>32</sup>、などの問いに沿って進めていく作文のワークブックであった。野地氏は、このようなワークブックを「やらされたということさえも忘れておりました」<sup>33</sup>とした上で、次のように述べている。

もう、痕跡も残っておりませんが、たまたまこういうものが残っておりましたから、その学習をどういうふうにするかですね。テスト学力、練習によって確かめられるものというのは、その痕跡が成果が残らないからむなしというふうには言えないと思うんですね。習熟していくプロセスですから、ある所までいきますと、それは完全に身につけばもう、忘れられるというのが、おのずからのことですので、技能的なものというのは、そういう宿命を一方でもっているんだと思います<sup>34</sup>

<sup>27</sup> 注1に同じ、p. 16

<sup>28</sup> 「父の記憶」の全文は『宇野浩二全集 第三巻』所収の「歳月の川」pp. 114-121で読むことができる。『宇野浩二全集 第三巻』の「あとがき」によれば、「歳月の川」は1921年6月『國粹』に初発表され、『わが日わが夢』（隆文館、1922年刊）に収録された。「歳月の川」は、「一 父の記憶（その一）」「二 父の記憶（その二）」「三 博多の城」「四 神戸の山」の四つの小品で構成されており、このうち「一」の全文と「二」の第1形式段落をつなぎ合わせたものが『第二讀本』の「父の記憶」となっている。これと同じ文章は、『第二讀本』のほか、芥川龍之介編[1981]『近代日本文藝讀本 第一集』日本図書センター（芥川龍之介編[1925]『近代日本文藝讀本』興文社の復刻版）pp. 165-172や、中内敏夫監修[2006]『復刻 鑑賞文選・綴方讀本 2』緑蔭書房（1926年1月～6月に発行された『讀方綴方鑑賞文選』文園社の復刻版）pp. 383-384（尋常六年〈大正15年6月号〉）で読むことができる。

<sup>29</sup> 水上勉[1979]『宇野浩二伝（下）』中央公論社、p. 53（初出は1971年）

<sup>30</sup> 宇野浩二著、文芸春秋新社、1953年刊

<sup>31</sup> 野山嘉正[1989]「宇野浩二・人と作品」宇野浩二ほか『昭和文学全集 第3巻』小学館、p. 1056

<sup>32</sup> 注1に同じ、pp. 43-46

<sup>33</sup> 注1に同じ、p. 43

<sup>34</sup> 注1に同じ、p. 47



ここでの「痕跡」や「成果」といった語は「記憶」に置き替えてよいと思われる。国語学習回想・国語学習個体史に果たす記録と記憶の役割については、歴史学や記憶研究の知見に学びつつ別に検討する必要があるだろう。しかし少なくとも一つの事実として、記録にはあるが記憶にはない国語学習というものがあり、野地氏の言うようにそれが「むなしい」とは言えない、自分の記憶に残っていないところで、まだ自分の気づいていないところで多くの国語指導が営まれているに違いなく、記憶に残っていないという理由でその授業の価値が低められるわけではないということは重要であると考えられる。逆に言えば、単に記憶に残っているということをもってそれが「すぐれた授業」になるわけでもなく、その国語学習の記憶が、それを語るひとの人生にどのような恵みをもたらしたかということこそが問われるべきだと考える。

## 6 まとめ

本研究で取り上げた野地氏の国語学習個体史は、先行研究では、「国語教育者成長史の具体事例」（国語教師はどのようにして育っていくかの一典型）として<sup>35</sup>、国語教育実践を「教師と学習者の両面からとらえる道」を開く方法の一つとして<sup>36</sup>、あるいは「国語教育方法の深化の手法の一つ」として<sup>37</sup>意義づけられてきた。しかし、以上の検討から、国語学習個体史がもつ別の側面も見えてきたように思われる。それは「国語学習の記憶を育成する学習材」としての側面である。

野地氏は、「国語学習の極印」について、「学習者一人一人の中に、ひそやかに、或はげざやかに、生き続ける趣をもっているように思われる」<sup>38</sup>とし、「例えていえば、石清水のように、自分の心の中に溢れてくるものがある」<sup>39</sup>というように、「極印」を「石清水」にたとえている。では「国語学習の極印」は何を溢れさせているのか、何の源泉になっているのだろうか。それはここまで述べてきたように、言語生活者や国語教師としての目標や自覚であり、支えや励ましではないかと考える。それはおそらく、青木幹勇氏が学習者に育成したいものの一つとして論じた「学習目標意識」<sup>40</sup>に相当するような、自分のめあてのもとに自主的・自発的に国語学習を展開しようとする姿勢ではないかと考えられる。「国語学習の極印」は目標意識の源泉だと考えられる。言い換えれば、一言語生活者として、あるいは一国語教師として、自分の力で学び深めていこうとする励みをもてるのは、そのひとの内に「国語学習の極印」が成立しているからこそであろうと考えられる。これが本研究の結論である。

「国語学習の極印」はいかにして形成されるのかという問いはむずかしく、かりに今回取り上げた授業事例を応用したとしても、その授業が学習者の記憶に残るとは限らない。「学習者の記憶に残る国語科授業」をつくらうとする発想にも意味はあろうが、それよりも、「学習者の記憶を育てる国語科授業」という考え方を採るほうが有効なことも多いように思われる。その一端として、本研究では、国語学習個体史は国語科授業の記憶を育てる学習材となり、国語科授業の記憶は目標意識を

<sup>35</sup> 大槻和夫[1998]「国語教育個体史研究の意義——国語教育実践・研究の確かな拠点の構築——」中西一弘編著『野地潤家著作選集 別巻2 野地潤家国語教育論を読む』明治図書、p. 18

<sup>36</sup> 浜本純逸[1998]「実証性と物語性——野地潤家先生の国語教育史研究——」中西一弘編著『野地潤家著作選集 別巻2 野地潤家国語教育論を読む』明治図書、p. 37

<sup>37</sup> 間瀬泰男[1998]「碩儒野地潤家先生の学の方法——『国語教育の創造』と『国語教育の探究』の二書を通して——」中西一弘編著[1998]『野地潤家著作選集 別巻2 野地潤家国語教育論を読む』明治図書、p. 284

<sup>38</sup> 注1に同じ、p. 19

<sup>39</sup> 注1に同じ、p. 28

<sup>40</sup> 青木幹勇[1963. 8]「国語科学習指導の目標——子どもの目標意識をめぐる——」『教育研究』飛田多喜雄・野地潤家監修[1993]『国語教育基本論文集成 第一巻』明治図書、pp. 299-310

育てる学習材となりうることを論じた。本研究の成果と課題を踏まえ、国語科教育における学習者の目標意識の育成について、さらに考えていきたい。

## 7 参考文献

- 青木幹勇[1963. 8]「国語科学習指導の目標——子どもの目標意識をめぐって——」『教育研究』飛田多喜雄・野地潤家監修[1993]『国語教育基本論文集成 第一巻』明治図書、pp. 299-310
- 芥川龍之介編[1981]『近代日本文藝讀本 第一集』日本図書センター（芥川龍之介編[1925]『近代日本文藝讀本』興文社の復刻版。次の文献も同じ）
- 芥川龍之介編[1981]『近代日本文藝讀本 第五集』日本図書センター
- 池田悦子[1986. 8]「野地潤家著『国語教育の探究』〈新刊紹介〉」『国語教育研究』30、pp. 161-162
- 宇野浩二[1968]『日本文学全集 30 宇野浩二集』集英社
- 宇野浩二[1972]『宇野浩二全集 第3巻』中央公論社
- 宇野浩二[1972]『宇野浩二全集 第11巻』中央公論社
- 宇野浩二ほか[1989]『昭和文学全集 第3巻』小学館
- 宇野浩二[1995]『作家の自伝 30 宇野浩二』日本図書センター
- 大槻和夫編[1984]『野地潤家先生に学びて』溪水社
- 齋藤清衛編[1926]『第二讀本』星野書店
- 竜田徹[2010. 12]「国語科教育における学習目標意識に関する一考察」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部（文化教育開発関連領域）』59、pp. 141-150
- 竜田徹[2011. 3]「大村はま国語教室における「実の場」の検討」『教育学研究紀要』（CD-ROM版）56、pp. 90-96
- 竜田徹[2014. 3]「大村はま国語教室の学習記録における「あとがき」の記述内容の分析と考察」『九州国語教育学会紀要』3、pp. 21-32
- 竜田徹[2014. 3]「学習者の記憶に残る国語科授業——教員養成課程の大学生を対象とした質問紙調査を手がかりに——」『佐賀大國文』pp. 81-97
- 中内敏夫監修[2006]『復刻 鑑賞文選・綴方讀本 2』緑蔭書房（1926年1月～6月に発行された『讀方綴方鑑賞文選』文園社の復刻版）
- 中西一弘編著[1998]『野地潤家著作選集 別巻2 野地潤家国語教育論を読む』明治図書
- 野地潤家[1982]『国語教育の創造』国土社
- 野地潤家[1985]『国語教育の探究』共文社
- 野地潤家[1996]『最終講義を聴いて——贈る言葉——』溪水社
- 野地潤家[1998]『野地潤家著作選集 第1巻 国語教育个体史 原理編』明治図書
- 野地潤家[1998]『野地潤家著作選集 第2巻 国語教育个体史 実践編Ⅰ』明治図書
- 野地潤家[1998]『野地潤家著作選集 第3巻 国語教育个体史 実践編Ⅱ』明治図書
- 野地潤家[1998]『野地潤家著作選集 第4巻 国語教育个体史 実践編Ⅲ』明治図書
- 野地潤家[1998]『野地潤家著作選集 第5巻 国語教育史の探究』明治図書
- 野地潤家[1998]『野地潤家著作選集 別巻1 真の国語教育を求めて』明治図書
- 野地潤家[2002]『昭和前期中学校国語学習个体史——旧制大洲中学校（愛媛県）に学びて——』溪水社
- 橋本迪夫ほか注釈[1970]『日本近代文学大系 第40巻 広津和郎・宇野浩二・葛西善蔵集』角川書店

広島大学大学院教育学研究科国語文化教育教育学講座編[2010.9]「野地潤家先生談話記録Ⅰ 面々顔つ」

『論叢国語教育学』復刊第1号（通巻6号）pp.34-51

松崎正治[2013]「ライフヒストリーに関する研究の成果と展望」全国大学国語教育学会編『国語科  
教育学研究の成果と展望Ⅱ』学芸図書、pp.447-454

水上勉[1979]『宇野浩二伝（上）』中央公論社

水上勉[1979]『宇野浩二伝（下）』中央公論社

#### 付記

本稿は、2014年3月8日（土）に開かれた第41回佐賀大学国語国文学会の研究発表（題目は本稿と同じ）の内容をもとに加筆・修正したものである。発表後には、達富洋二先生（佐賀大学教授）、古川末喜先生（佐賀大学教授）、廣瀧由紀子先生（佐賀市立本庄小学校教諭）、中島彩さん（佐賀大学文化教育学部学生）からご質問やご感想を寄せていただき、それをもとに加筆・修正を行った部分もある。四氏をはじめ当日お聞きいただいた皆様に記して御礼申し上げたい。

（佐賀大学）